埼玉県和光市

市内遺跡発掘調査報告書　27

峯（みね） 遺 跡（第4次）

峯前（みねまえ） 遺 跡（第8次）

付篇　越後山遺跡出土種子圧痕土器について

2024・3

和光市教育委員会

序　文

この度、『市内遺跡発掘調査報告書 27』（和光市埋蔵文化財調査報告書第 71 集）を刊行することとなりました。現在、市内には 43 か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。埋蔵文化財をはじめとする文化財は、今日まで守り伝えられてきた貴重な財産であり、私たちにはこれを保護し後世に伝えていく使命があると考えています。近年、本市では交通の利便性の面から急激な宅地造成・開発等が続いていますが、埋蔵文化財の現状保存が困難である場合は、関係者のご協力をいただき、記録保存のための発掘調査を実施しております。

今回発行する報告書は、峯遺跡第 4 次調査、峯前遺跡第 8 次調査に加え、付篇として越後山遺跡第 2 次調査で出土した種子圧痕土器について報告するものです。なお、越後山遺跡出土種子圧痕土器の報告にあたっては、金子直行氏と朝霞市博物館の皆様に多大なご協力をいただきました。ご協力をいただきました各位に改めて感謝申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたりまして日ごろからご指導いただいております埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、和光市文化財保護委員会、発掘調査に携わった方々、そして土地所有者並びにご協力をいただきました関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

和光市教育委員会

教育長　石川　毅

例　言

1. 本書は埼玉県和光市に所在する峯遺跡（第4次）、峯前遺跡（第8次）の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と所在地、文化財保護法第99条に基づく発掘調査通知は以下のとおりである。
峯遺跡第4次　和光市新倉二丁目3470-1の一部、3470-3の一部、3470-4、令和2年6月4日付、和教生第 23 号

峯前遺跡第8次　和光市新倉二丁目2983番4、2984番1、令和4年1月6日付、和教生第162号

3. 発掘調査は、峯遺跡第4次が個人住宅建設、峯前遺跡第8次が共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。

4. 所収遺跡の調査期間及び調査面積は以下のとおりである。
峯遺跡第4次調査　2020（令和２）年6月26日～同年7月27日　55.8㎡
峯前遺跡第8次調査　2022（令和4）年1月11日～同年1月20日　36.0㎡

5. 発掘調査及び整理作業は、和光市教育委員会が主体となり、峯遺跡第4次調査は国庫及び県費補助金の交付を受け、峯前遺跡第8次調査は事業主から調査協力・支援を受けて実施した。調査は峯遺跡第4次を鈴木一郎・前田秀則が担当した。峯前遺跡第8次は鈴木一郎・野澤均が担当し、作業の一部について株式会社中野技術の調査支援を受けた。

6. 本書の作成は、和光市教育委員会が行い、編集は山本 龍、野澤 均が行った。執筆は分担し、第Ⅰ章を相田由莉、第Ⅱ章を鈴木一郎、第Ⅲ章第１節・第2節・第4節出土遺物、第Ⅳ章第1節を坂口由加里、第Ⅲ章第3節～5節を野澤 均、第Ⅳ章第2～5節を石橋佳奈が行った。

7. 付篇として、越後山遺跡第2次調査区出土の種子圧痕土器について行った資料報告を所収した。なお、資料報告にあたって、金子直行氏に玉稿を賜った。また、資料の写真撮影については、朝霞市教育委員会文化財課にご協力いただき作成した展開写真を図版として掲載した。

8. 遺物の注記は、峯遺跡第4次を「35・4次」、峯前遺跡第8次を「3・8次」とした。

9. 現地調査の写真撮影は、鈴木一郎、越村 篤、遺物写真の撮影は大内一雄が行った。

10. 本書掲載資料ならびに本発掘調査の記録類および出土遺物等は、和光市教育委員会にて収蔵保管される。

11. 現地調査から遺物整理、報告書作成にあたり、下記の諸氏、諸機関からご教示・ご援助を賜った。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。
埼玉県教育局市町村支援部文化資源課　和光市文化財保護委員会　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　朝霞市博物館　朝霞市埋蔵文化財センター　川島 英明　佐々木 洋　江原 順
大久保 聡　尾形 則敏　柿沼 幹夫　加藤 秀之　金子 直行　川畑 隼人　黒尾 和久　斉藤 純
佐野 隆　斯波 治　照林 敏郎　徳留 彰紀　中山 誠二　根本 靖　前田 秀則　安田 脩一　山田 尚友

凡　例

1. 挿図中の方位は座標北を示し、水糸レベルは海抜標高を表す。

2. 遺跡におけるグリッドの設置は、国家標準直角座標に基づいて設置しており、4m×4m方眼である。

3. グリッドの名称は、南西杭を基準として、X軸（南北）を南から算用数字（1～25）、Y軸（東西）を西からアルファベッド（A～Y）で表記し、それらの組み合わせ、例えばA－1グリッド等と呼称した。

4. 本書図版の縮尺は、原則として遺構実測図を1/60、遺物実測図を1/3としたが、例外のものについては個々にスケールを付した。

5. 住居平・断面図にある記号は、P1：ピット1等を示す。

6. 図版中の網かけは、焼土・赤色塗彩を表した。

7. 図版中の記号は、●（土器）を表す。

8. 遺物観察の数値はcmで、(　) は復元値を示す。

9. 遺物観察表の胎土は次の表記で示している。
A：砂粒、B：赤色粒、C：白色粒、D：小石、E：金雲母、F：雲母、G：石英、H：長石、I：輝石・角閃石、J：白色針状物質、K：繊維

10. 土層注記に記載した色調の表現は、『新訂標準土色帖』（1997年版・農林水産省監修）に従った。

11. 遺構図版中の一点鎖線は撹乱を示し、点線は推定を示す。

12. 遺構番号は各遺跡とも前調査から継承した通し番号を順に付した。

調 査 組 織（2024（令和6）年3月現在）

調査主体者	和光市教育委員会
担当課	生涯学習課
教育長	石川　毅
教育部長	寄口　昌宏
次長兼生涯学習課長	亀井　義和
課長補佐兼文化財保護担当統括主査	山本　龍
文化財保護担当主査	上原　功治
文化財保護担当主査	中岡　貴裕
文化財保護担当主任	鈴木　一郎
文化財保護担当主事	相田　由莉
会計年度任用職員（文化財調査指導員）	野澤　均
会計年度任用職員	江口　やよい

発 掘 調 査

峯遺跡第4次調査担当	鈴木　一郎　　前田　秀則（日本考古学協会会員）
峯前遺跡第8次調査担当	鈴木　一郎　　野澤　均
峯前遺跡第8次調査調査員	越村　篤（株式会社中野技術）

発掘調査及び整理作業参加者

植田 英孝　大内 一雄　黒坂 佳代子　坂口 由加里　上坊 紀美子　田中 由美
石橋 佳奈（株式会社中野技術）

目　次

序文
例言・凡例
調査組織
目次（本文・挿図・挿表・図版）

第Ⅰ章　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・ 1
　第1節　峯遺跡（第4次）の調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・ 1
　第2節　峯前遺跡（第8次）の調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・ 3

第Ⅱ章　市域の地形と遺跡 ・・・・・・・・・・ 5
　第1節　市域の地形 ・・・・・・・・・・ 5
　第2節　市域の遺跡 ・・・・・・・・・・ 6

第Ⅲ章　峯遺跡（第4次）の調査 ・・・・・・・・・・ 11
　第1節　峯遺跡の概要 ・・・・・・・・・・ 11
　第2節　調査の方法と経過 ・・・・・・・・・・ 11
　第3節　基本層序 ・・・・・・・・・・ 11
　第4節　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・ 12
　第5節　小結 ・・・・・・・・・・ 13

第Ⅳ章　峯前遺跡（第8次）の調査 ・・・・・・・・・・ 22
　第1節　峯前遺跡の概要 ・・・・・・・・・・ 22
　第2節　調査の方法と経過 ・・・・・・・・・・ 22
　第3節　基本層序 ・・・・・・・・・・ 22
　第4節　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・ 23
　第5節　小結 ・・・・・・・・・・ 23

第Ⅴ章　付篇　越後山遺跡出土種子圧痕土器について ・・・・・・・・・・ 29

資料　令和4年度埋蔵文化財確認調査一覧 ・・・・・・・・・・ 48
写真図版

挿図目次

第１図　峯遺跡位置図 …… 1
第２図　峯遺跡（第4次）確認調査トレンチ配置図 …… 2
第３図　峯前遺跡位置図 …… 3
第４図　峯前遺跡（第8次）確認調査トレンチ配置図 …… 4
第５図　武蔵野台地と周辺地形区分図 …… 5
第６図　和光市遺跡分布図 …… 9
第７図　基本層序 …… 12
第８図　峯遺跡発掘調査位置図 …… 14
第９図　峯遺跡遺構位置図 …… 15
第10図　峯遺跡第4次調査区遺構全体配置図 …… 16
第11図　第4号住居跡平・断面図 …… 17
第12図　第5号住居跡平・断面図 …… 17
第13図　第1号方形周溝墓平・断面図 …… 18
第14図　第1号方形周溝墓出土遺物（1）…… 19
第15図　第1号方形周溝墓出土遺物（2）…… 20
第16図　遺構外出土遺物 …… 20
第17図　基本層序 …… 23
第18図　峯前遺跡発掘調査位置図 …… 24
第19図　峯前遺跡遺構位置図 …… 25
第20図　峯前遺跡第8次調査区遺構全体配置図 …… 26
第21図　第15号住居跡平・断面図 …… 27
第22図　越後山遺跡発掘調査位置図 …… 34
第23図　越後山遺跡遺構位置図 …… 35
第24図　第7号住居跡平・断面図 …… 36
第25図　種子圧痕土器実測図 …… 37
第26図　種子圧痕土器6面展開図 …… 39
第27図　第7号住居跡土器個体別分布図（1）…… 41
第28図　第7号住居跡土器個体別分布図（2）…… 42
第29図　種子圧痕土器正面写真 …… 43
第30図　種子圧痕土器外面展開写真 …… 44
第31図　種子圧痕土器内面展開写真 …… 45
第32図　種子圧痕土器6面展開写真 …… 46
第33図　種子圧痕土器平面展開写真 …… 47

挿表目次

第１表　市内遺跡一覧表 …… 8
第２表　第1号方形周溝墓出土遺物観察表 …… 21
第３表　遺構外出土遺物観察表 …… 21

図版目次

図版１　昭和31年代の和光市土地利用動向
図版２　峯遺跡（第4次）
　第1号方形周溝墓（南東から）
　第1号方形周溝墓（北から）
図版３　峯遺跡（第4次）
　第1号方形周溝墓（北東コーナー）
　基本層序
　第1号方形周溝墓土層堆積状態（東から）
　第1号方形周溝墓遺物出土状態（南東コーナー付近）
　作業風景
図版４　峯遺跡（第4次）
　第4号住居跡完掘（西から）
　第5号住居跡完掘（西から）
図版５　峯遺跡（第4次）
　第1号方形周溝墓出土遺物
　遺構外出土遺物
図版６　峯前遺跡（第8次）
　調査区近景（南西から）
　調査区全景（南西から）
図版７　峯前遺跡（第8次）
　第15号住居跡完掘（南東から）
　P1土層堆積状態（南西から）
　P1完掘（西から）
　P2土層堆積状態（南西から）
　P2完掘（北から）
図版８　峯前遺跡（第8次）
　P3土層堆積状態（南西から）
　P3完掘（東から）
　P4土層堆積状態（南西から）
　P4完掘（南西から）
　P5土層堆積状態（北東から）
　P5完掘（北東から）
　作業風景

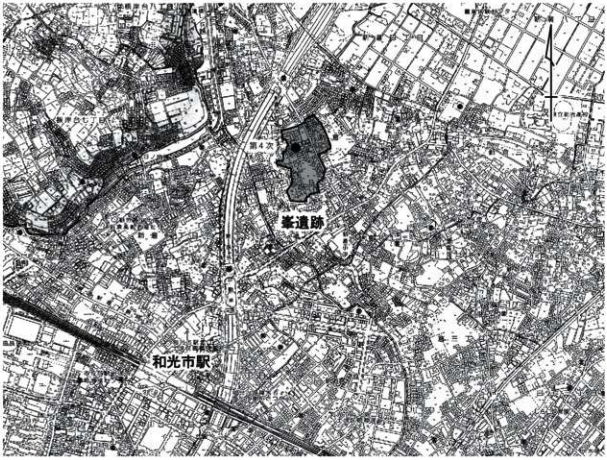
第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　峯遺跡（第４次）の調査に至る経緯

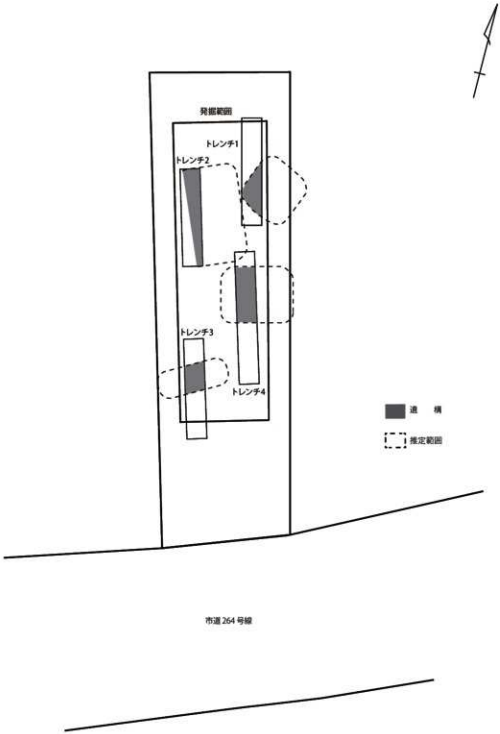
令和２年３月10日付で事業主体者から和光市教育委員会(以下､｢市教育委員会｣という。)に対し、和光市新倉二丁目3470-1の一部、3470-3の一部、3470-4における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼書が提出された。これを受け、市教育委員会は令和２年６月２日に確認調査を行った。その結果、古墳時代の住居跡と土坑と思われる遺構等が確認された。事業主体者と市教育委員会は保存に関する協議を重ね、遺構の現状保存は困難であるという結論に至ったことから記録保存の措置として発掘調査を実施することとなった。

調査対象面積は103.02㎡であり、本調査実施面積は55.8㎡である。

発掘調査期間は令和２年６月26日から７月27日である。



第１図　峯遺跡位置図（S＝1/14000）



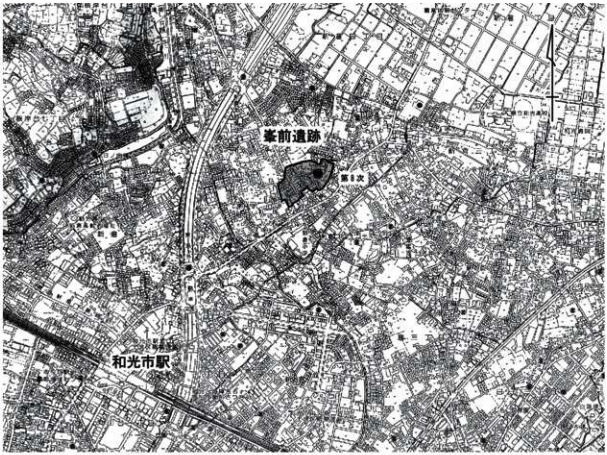
第２図　峯遺跡（第４次）確認調査トレンチ配置図（S=1/150）

第２節　峯前遺跡（第８次）の調査に至る経緯

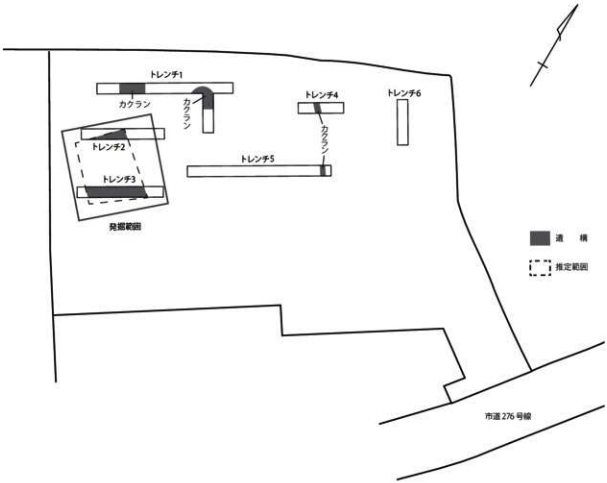
令和３年 10 月 14 日付で事業主体者から市教育委員会に対し、和光市新倉二丁目 2983 番 4、2984 番 1 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼書が提出された。これを受け、市教育委員会は令和３年 11 月 22 日に確認調査を行った。その結果、平安時代の住居跡と思われる遺構等が確認された。事業主体者と市教育委員会は保存に関する協議を重ね、遺構の現状保存は困難であるという結論に至ったことから記録保存の措置として発掘調査を実施することとなった。

調査対象面積は 499.02㎡であり、本調査実施面積は 36.0㎡である。

発掘調査期間は令和４年１月 11 日から１月 20 日である。



第３図　峯前遺跡位置図（S＝1/14000）



第４図　峯前遺跡（第８次）確認調査トレンチ配置図（S=1/250）

第Ⅱ章　市域の地形と遺跡

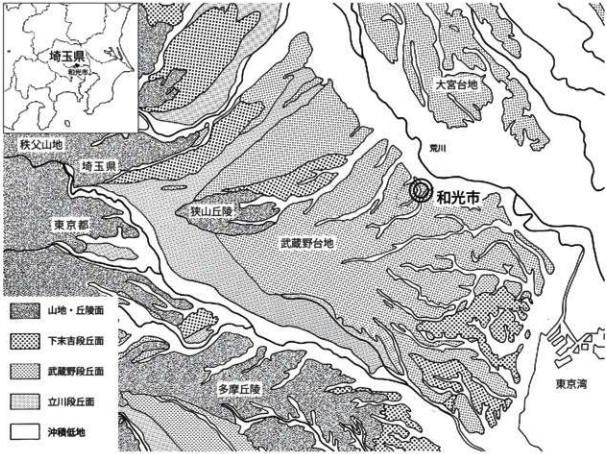
第１節　市域の地形

和光市は、埼玉県南西部の荒川右岸に位置し、北は戸田市、西は朝霞市、南は東京都練馬区、東は東京都板橋区と隣接している。

和光市の地形は、市の北部を流れる荒川により形成された沖積低地（荒川低地）と武蔵野台地北東端にあたる洪積台地とに分けられる。低地部の標高は５～6m、台地部の標高は 27～40m 程で南の台地奥へ行くにしたがい高くなっている。

市内には、中小河川が流れており、特に東側を流れる白子川と西側を流れる越戸川は、大きな谷を形成し、行政的、地形的な区分の境ともなっている。その他、市内の中心部を流れる谷戸川は、谷中川と合流し蛇行しながら、越戸川にそそいでいる。市内の台地は、荒川も含めこれらの河川により浸食が激しく、多くの小支谷が形成されている。そのため、谷に挟まれた台地は幅の狭い複雑な形状となっている。

また、河川近くの崖地では湧水が各所で見られ、湧き水公園や寺社の池として現在も親しまれている。



第５図　武蔵野台地と周辺地形区分図（S＝1/400000）

第２節　市域の遺跡

現在和光市内で確認されている遺跡は 43 ヵ所（第６図・第１表）であり、荒川低地の自然堤防上に位置する榎堂遺跡（No.23）以外はすべて台地上に位置している。遺跡の主な分布状況は、荒川低地に面した崖線上、白子川左岸の崖線上、越戸川・谷中川・谷戸川の支谷に面した小規模な台地上に分布している。

市内の旧石器時代の主な遺跡は、花ノ木遺跡（No.2）、四ツ木遺跡（No.4）、午王山遺跡（No.5）、柿ノ木坂遺跡（No.11）、城山南遺跡（No.18）、水久保遺跡（No.25）、妙蓮寺遺跡（No.32）、仏ノ木遺跡（No.36）が存在し、礫群のほかナイフ形石器や各種石器の集中ブロックが検出されている。特に花ノ木遺跡、柿ノ木坂遺跡、仏ノ木遺跡ではⅥ～Ⅶ層での文化層が確認されている。また、城山南遺跡では第Ⅲ層中から有樋型の尖頭器が検出されている。

縄文時代の主な遺跡は、四ツ木遺跡、柿ノ木坂遺跡、吹上遺跡（No.13）、吹上貝塚（No.16）、吹上原遺跡（No.15）、市場峡・市場上遺跡（No.17）、城山南遺跡、白子宿上遺跡（No.19）、丸山台遺跡（No.24）、水久保遺跡、義名山遺跡（No.27）、庚塚遺跡（No.30）、妙蓮寺遺跡、越後山遺跡（No.41）、西越後山遺跡（No.42）が存在する。

早期では、城山南遺跡、白子宿上遺跡で撚糸文土器が出土し、市場峡・市場上遺跡、城山南遺跡、白子宿上遺跡、西越後山遺跡では、炉穴と貝殻条痕文系土器が検出されている。

前期では、白子宿上遺跡で花積下層式土器と住居跡が検出され、吹上遺跡では黒浜式期の住居内貝塚、市場峡・市場上遺跡では黒浜式・諸磯式期の集落と同期の住居内貝塚が検出された調査区がある。

中期では、勝坂式期から加曽利 E1 式期の時期の異なる土器が貝層の上部と下部に分かれて住居内から出土し、その土器廃棄について「吹上パターン」が提唱された学史的にも知られている吹上貝塚のほか、水久保遺跡・城山南遺跡で住居跡、吹上原遺跡、庚塚遺跡・妙蓮寺遺跡では、勝坂式期から加曽利 E 式期の集落が検出され、越後山遺跡では、硬玉製大珠が土坑から検出されている。

後・晩期では、義名山遺跡が称名寺式期を主とする集落で、柿ノ木坂遺跡、丸山台遺跡、白子宿上遺跡が称名寺式期から堀之内Ⅰ式期の集落である。四ツ木遺跡、吹上遺跡では検出例が少ない加曽利 B 式期から安行式期の集落が検出されている。

弥生時代から古墳時代前期の主な遺跡は、花ノ木遺跡、峯前遺跡（No.3）、四ツ木遺跡、午王山遺跡、吹上遺跡、妙典寺遺跡（No.14）、吹上原遺跡、市場峡・市場上遺跡、白子宿上遺跡、城山遺跡（No.22）、榎堂遺跡、越之上遺跡（No.39）、越後山遺跡が存在する。弥生時代中期の遺構と遺物を伴う遺跡は、現在のところ花ノ木遺跡、午王山遺跡の２遺跡のみであるが、吹上原遺跡では方形周溝墓が１基、吹上遺跡では土器片のみ出土している。弥生時代後期では、環濠集落が目を引き、花ノ木遺跡では外かく環状道路を境に西側では二条の環濠が北西の上之郷遺跡（No.1）へ延びるように検出され、東側では一条の環濠が北東方向へ延びるように検出されている。午王山遺跡では独立丘上に二重ないし三重の環濠が展開している。吹上遺跡では一条の環濠が 70m 程検出されている。周溝墓は前述の環濠を伴う３遺跡のほか、四ツ木遺跡、下里遺跡（No.12）、吹上原遺跡、白子宿上遺跡、低地の榎堂遺跡で検出されている。

古墳時代中期から後期の主な遺跡は、上之郷遺跡、花ノ木遺跡、四ツ木遺跡、午王山遺跡、吹上遺跡、妙蓮寺遺跡が存在し、上之郷遺跡、吹上遺跡では5世紀代の住居跡が数軒検出されている。6世紀以降は、各遺跡での住居は軒数が多く集落を成している。現在のところ市内には、墳丘を持つ古墳は確認されていないが、吹上原遺跡で古墳と見られる円形周溝が4基ほど検出されている。横穴墓では、吹上原横穴墓群（№20）、市場峡・市場上遺跡で7世紀後半代の横穴墓が検出されている。

奈良・平安時代の主な遺跡は、花ノ木遺跡、峯前遺跡、仏ノ木遺跡、吹上遺跡、市場峡・市場上遺跡、榎堂遺跡、漆台遺跡（№43）が存在する。8世紀代の遺構は少なく、吹上遺跡で8世紀後半の住居跡が6軒程検出されているほか、隣接する下里遺跡では、8世紀前半の住居が1軒、花ノ木遺跡の事業団調査区では8世紀後半の住居跡が3軒、仏ノ木遺跡で8世紀前半の墓が1基検出されている。9世紀代の住居跡は数多く検出され、特に新倉2丁目の花ノ木遺跡から漆台遺跡にかけての200×700m程の台地上は一つの大きな集落と考えることができる。中でも花ノ木遺跡では、1軒の焼失住居から全国で3例目となる火熨斗のほか落とし鍵、須恵器壺等が出土し、埼玉県指定文化財に一括指定されている。

中世・近世では、数ヶ所の遺跡で箱薬研堀状の溝が検出されているが、城館跡等は現在のところ確認されていない。しかし午王山遺跡では、当時の設置状況が窺われる45基の板碑群が発見され、花ノ木遺跡では中世末から近世の墓坑群が発見されており、妙蓮寺遺跡では、中世の地下式坑のほか、火葬墓、土坑が検出されている。

市内の遺跡の時代ごとの分布状況は、旧石器時代は台地の崖線上、縄文時代は市域全般の台地上、弥生時代は白子川左岸の台地上と荒川右岸の台地上、古墳時代は荒川右岸の台地上、平安時代は新倉2丁目の台地上に主な分布がみられ、弥生時代と平安時代の遺跡分布には、密集した状況が窺える。

第１表　市内遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	主な時代・時期	所在地
1	上之郷遺跡	集	弥(後)・古(前)	新倉２丁目3207～3210外
2	花ノ木遺跡	集	旧・縄・弥(後)・古・奈・平・中・近	新倉２丁目3440～3443外
3	峯前遺跡	集	旧・弥・古・平	新倉２丁目2987～2989外
4	四ツ木遺跡	集	旧・縄(早～晩)・弥・古・平	新倉３丁目2925～2928外
5	午王山遺跡	集	旧・縄・弥・古・平・中	新倉３丁目2829～2843外
6	上谷津遺跡	集	縄	新倉１丁目3937外
7	向原遺跡	集	縄	新倉１丁目3848～3854外
8	松山遺跡	集	縄	新倉１丁目4012～4020外
9	小井戸遺跡	集	縄	新倉１丁目4252～4255外
10	柿ノ木坂西遺跡	集	縄・中	新倉１丁目3786～3791外
11	柿ノ木坂遺跡	集	旧・縄(中・後)・弥・古・平	新倉１丁目3764～3773外
12	下里遺跡	集・貝	弥(後)・古・奈	下新倉４丁目4424外
13	吹上遺跡	集・貝	旧・縄・弥・古・奈・平	白子３丁目4417～4421外
14	妙典寺遺跡	集	縄・弥(後)・古	下新倉４丁目2045～2059外
15	吹上原遺跡	集・古	縄(中)・弥(後)・古・近	白子３丁目4445～4448外
16	吹上貝塚	集・貝	縄(前・中)	白子３丁目4376外
17	市場峡・市場上遺跡	集・貝・横	縄(早～後)・弥・古・平	白子３丁目589～596外
18	城山南遺跡	集	旧・縄	白子２丁目1043～1048外
19	白子宿上遺跡	集・貝	縄(早～後)・古・平	白子２丁目1101～1107外
20	吹上原横穴墓群	横	古(後)	白子３丁目178,4463,4464外
21	牛房遺跡	集	縄(中)・古	南１丁目2386～2391外
22	城山遺跡	集	縄・弥・古・平	白子３丁目735～743外
23	榎堂遺跡	集	弥(後)・古・平・中	下新倉６丁目133外
24	丸山台遺跡	集	旧・縄(後)	丸山台２丁目25－1外
25	水久保遺跡	集	旧・縄(中)・古・平	新倉１丁目3673～3717外
26	丸山遺跡	集	縄	丸山台１丁目11－3外
27	義名山遺跡	集	縄(後)	丸山台２丁目23－1外
28	中丸遺跡	集	縄	丸山台２丁目8－11外
29	浅川遺跡	集	縄	丸山台３丁目10－9外
30	庚塚遺跡	集	縄(中)・中	下新倉２丁目1376～1380外
31	谷戸島遺跡	集	縄(中)	下新倉２丁目1233～1238外
32	妙蓮寺遺跡	集	旧・縄(中)・古(後)・中	下新倉２丁目1124外
33	向山遺跡	集	縄(中)	南２丁目1535外
34	半三池遺跡	集	弥(後)	新倉２丁目3009～3012外
35	峯遺	集	旧・縄(早)・弥(後)・古・平	新倉２丁目3466～3474外
36	仏ノ木遺跡	集	旧・縄・奈・平	下新倉３丁目906外
37	宮ノ脇遺跡	集	縄(前)・平	下新倉３丁目1044外
38	北原新田遺跡	集	縄	新倉１丁目4324～4327外
39	越之上遺跡	集	縄・古(前)	白子２丁目1363～1378外
40	白子向山遺跡	集	縄	白子１丁目1959～1961外
41	越後山遺跡	集	旧・縄(中)・古	南１丁目2447～2465外
42	西越後山遺跡	集	縄(早)・古(前)	南１丁目2540～2545外
43	渉台遺跡	集	縄・平	新倉２丁目3581～3605外

種別　集：集落跡　貝：貝塚　横：横穴墓　古：古墳
時代　旧：旧石器　縄：縄文　弥：弥生　古：古墳　奈：奈良　平：平安　中：中世　近：近世
　　(　)内は時期

第Ⅲ章　峯遺跡（第４次）の調査

第１節　峯遺跡の概要

峯遺跡は東武東上線、東京メトロ有楽町線・副都心線和光市駅から北東に約 1.0km、和光市新倉２丁目 3466～3474 外に所在する（第１・６図、第１表）。遺跡北側には荒川低地が広がり、越戸川とその支流の谷中川により形成された馬の背状台地に立地している。標高は 26～29m を測り、低地との比高は約 17m 程である。

本遺跡ではこれまで４回の発掘調査が行われている（第８・９図）。これまでの調査の結果から、旧石器時代から近世に至る複合遺跡であることが判明している。なかでも主体となるのは弥生時代・古墳時代・平安時代である。古墳時代では、前期の壺・甕形土器が検出され、平安時代では、第１次調査区で９世紀中頃から後半の須恵器と鉄製穂刈具が検出されている。

周辺の遺跡として同じ台地上に花ノ木遺跡（№.2）・半三池遺跡（№.34）・峯前遺跡（№.3）・漆台遺跡（№.43）が隣接して所在する。花ノ木遺跡・半三池遺跡・峯前遺跡・漆台遺跡ではこれまでの調査で主に弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物が検出されている。本遺跡北側の舌状台地上に所在する上之郷遺跡（№.1）では弥生時代・古墳時代の遺構と遺物が検出されている。

第４次調査地点の概観

今回の第４次調査地点は谷中川右岸、本遺跡範囲の北西側に位置する。標高は約 27m を測り、低地との比高は約 17m である。調査区東側に近接して第１次調査区、北東側に第３次調査区、南東側に第２次調査区が位置する。調査地点周辺の現況はわずかに畑地を残し、宅地化されている。

第２節　調査の方法と経過

第４次調査は個人住宅建設に伴う事前調査として行われた。調査区は試掘調査（第Ⅰ章第１節）において遺構の確認された箇所を中心に範囲を設定した。

現地調査は令和２年６月 26 日から同年７月 27 日まで実施し、残土処理の関係から都合上西側半分を６月 26 日～７月 16 日まで先に行い、16 日同日に反転して 27 日まで東側の調査を行った。

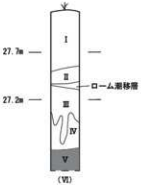
調査は国家座標値(旧日本測地系)を基に 4×4m 四方のグリッドを設定し、平面発掘を行った。BM は 29.1m である。調査にあたっては、重機を用いて表土を除去し、遺構確認面であるローム上面まで掘り下げた。遺構の確認及び掘り下げは人力で行い、測量については手実測で行った。また写真撮影にはデジタルカメラを使用して記録撮影を行った。

第３節　基本層序

調査区の全域が後世の耕作により掘削され、第Ⅱ層として黒色土からローム土への漸移層

が遺存していた。今回の調査では遺構確認面は第Ⅲ層上面とした。各土層は関東ローム層武蔵野面に対応する（第７図）。

第Ⅰ層　灰褐色土　耕作土
第Ⅱ層　黒褐色土　黒色土からローム土への漸移層
第Ⅲ層　褐色土　ソフトローム層
第Ⅳ層　黄褐色土　ハードローム層
第Ⅴ層　にぶい黄褐色土　立川ローム第１黒色帯に相当する
第Ⅵ層　黄褐色土　ハードローム層



第７図　基本層序（S＝1/40）

第４節　検出された遺構と遺物

第４号住居跡（第 11 図、図版４）

調査区東側 H-7 グリッドに位置する。平面形は、円形か楕円形を呈していたものと推測されるが、遺構全体の 1/4 程度しか検出されていないことから確定できない。残存長は、長軸 2.74m×短軸 1.2m を測る。遺構は西側のみの部分確認であることから主軸方向は確認出来なかった。確認面からの掘り込みは、約 16㎝を測り、炉跡・周溝・貼床ともに確認できなかった。付帯施設として浅いピットが確認された。平面形は、長軸 48㎝×短軸 32㎝を測る楕円形で、床面からの掘り込みは、13㎝を測る。本住居跡から遺物は出土していないが、覆土の状況などから弥生～古墳時代の住居跡であろう。

第５号住居跡（第 12 図、図版４）

調査区東側 H-5・6 グリッドに位置する。平面形は、円形か楕円形を呈していたものと推測されるが、遺構全体の 1/3 程度しか検出されていないことから確定できない。残存長は、長軸 3.16m×短軸 1.7m を測る。遺構は西側のみの部分確認であることから主軸方向は確認出来なかった。確認面からの掘り込みは、約 23㎝を測り、若干の硬化面が認められたほか炉跡・周溝ともに確認できなかった。付帯施設は、確認されなかった。本住居跡は、第１号方形周溝墓と切り合い関係にあるが、攪乱を受け新旧関係を確認することはできなかった。本住居跡から遺物は出土していないが、覆土の状況などから弥生～古墳時代の住居跡であろう。

第１号方形周溝墓（第 13 図、図版２・３）

調査区中央 G・H-4～7 グリッドに位置する。西側は調査区域外となり、遺構は全体の 1/6 程度が確認されている。平面形は、方形を呈していたものと推測されるが、東側の一辺と南側周溝の一部を検出したのみで、方形周溝墓の全体形状は不明である。検出された東側溝の残長は 10.8m を測り、溝幅は、上幅約 1.3～1.7m・下幅約 25～50㎝、確認面からの掘り込みは、約 70～90㎝を測る。断面形は、底部が平坦な箱状を呈する。
遺構の年代は、出土遺物から古墳時代前期初頭に比定される。

出土遺物（第 14・15 図、第２表、図版５）

10 点図示した。遺物は、主に南東側コーナー付近からの出土で、第 14 図２が出土して

いる。また、北東コーナー付近からは1・3・4・5・8・9がまとまって出土した。器種は壺形土器・甕形土器・高坏などが出土し、高坏は元屋敷タイプである。

1～3は壺形土器で、1・2は口縁部を欠損し肩部から底部にかけて遺存する。1は鋸歯文で区画した区画内に網目状撚糸文を施文する。施文部以外の外面は赤彩される。底部は焼成後の穿孔である。2は肩部外面に撚糸文を羽状に施文し、胴部下端を除き外面は赤彩される。3は頸部から肩部にかけて遺存する。円形浮文が貼付され、無節縄文を羽状に施文する。頸部内外面は赤彩される。4は高坏の坏部で内外面は赤彩される。5は甕形土器で、口縁部から胴部にかけて遺存する。外面と口縁部内面にハケ目、胴部内面はヘラナデが施される。6・7は台付甕の脚部で、6は胴部から脚部にかけて遺存する。接合部に指頭圧痕がみとめられる。7はハケ目が施される。8～10は甕形土器の破片資料で、8は口縁部から胴部、9・10は胴部片である。いずれもハケ目が施され、10は目の粗い工具によって施文される。接合はしないが、8・9は同一個体と考えられる。

遺構外出土遺物（第16図、第3表、図版5）

調査区西側の第1号方形周溝墓調査で出土した3点を図示した。第16図1～3は室町時代に比定されるロクロ成形のカワラケで、底部からやや丸みをもって立ち上がる。1は内外面に油煙が付着しており、燈明皿として使用されたと考えられる。

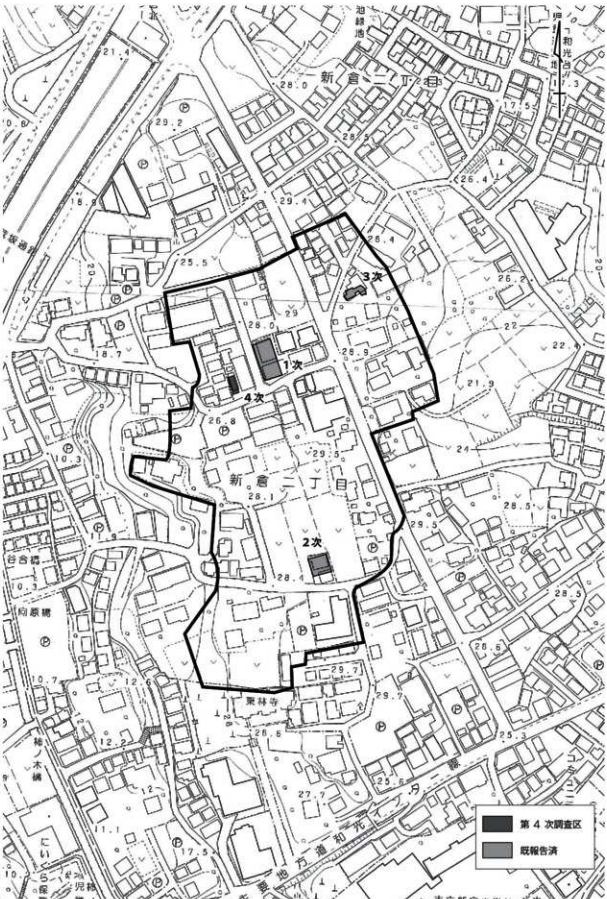
第5節　小結

本遺跡からは、弥生時代から古墳時代であろうと想定される住居跡2軒・古墳時代前期初頭と考えられる方形周溝墓を1基検出した。このことから峯前遺跡から峯遺跡にかけて弥生時代から古墳時代の大規模集落が展開していた可能性がより顕著に示されることとなった。

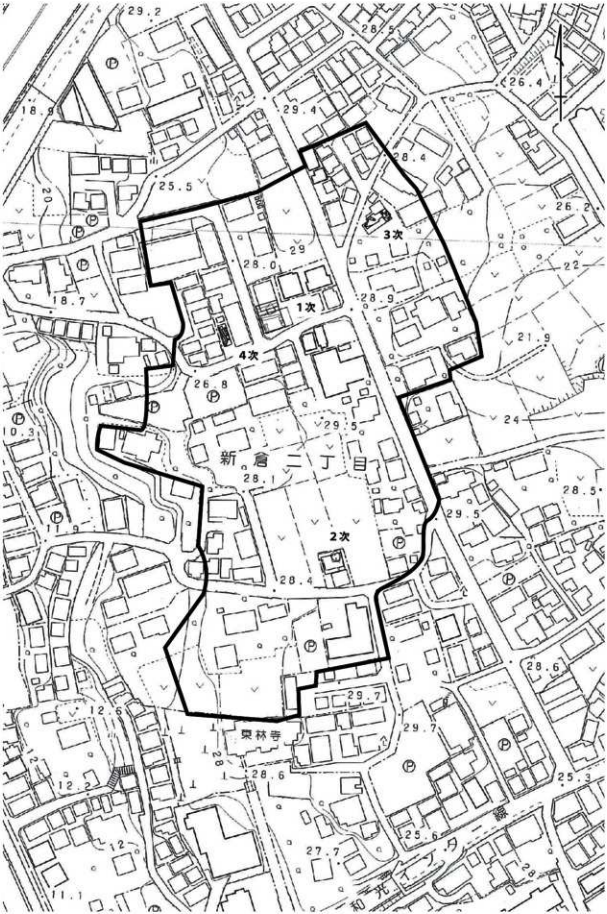
カワラケの時期は、峯の地名語源となった『峯の薬師』とされる東林寺の薬師如来立像は『和光市の仏像』によれば室町時代に造像されたものとされるが、時代的に近く、本遺跡の周囲の開発が峯の薬師同様中世まで遡ることを示唆するものとなった。

【引用・参考文献】

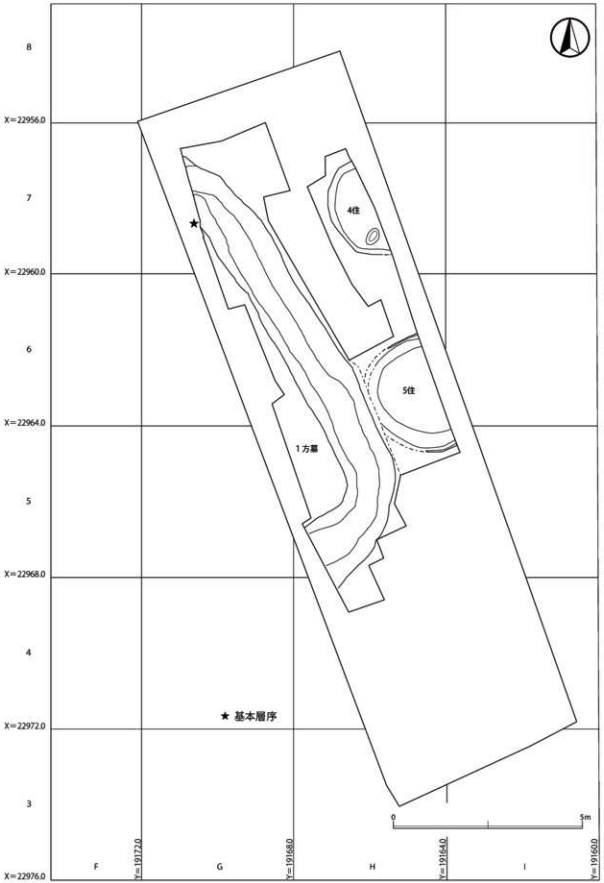
青木忠雄ほか　1979『和光市のむかし第7集　和光市の仏像　和光市仏像調査報告書』和光市教育委員会



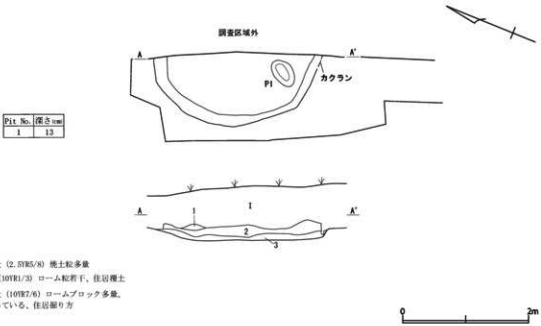
第８図　峯遺跡発掘調査位置図（S=1/2500）



第９図　峯遺跡遺構位置図（S=1/2000）



第10図　峯遺跡第４次調査区遺構全体配置図

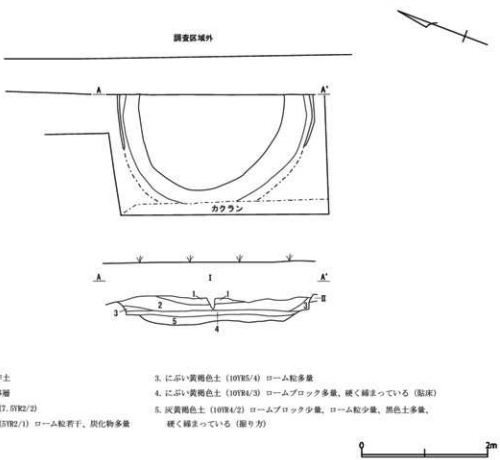


Pit No.	深さcm
1	13

住居土層

1. カクラン
1. 明赤褐色土（2.5YR5/8）焼土粒多量
2. 黒褐色土（10YR1/3）ローム粒若干、住居覆土
3. 明黄褐色土（10YR7/6）ロームブロック多量、硬く締まっている、住居張り方

第11図　第４号住居跡平・断面図（L＝27.7m）



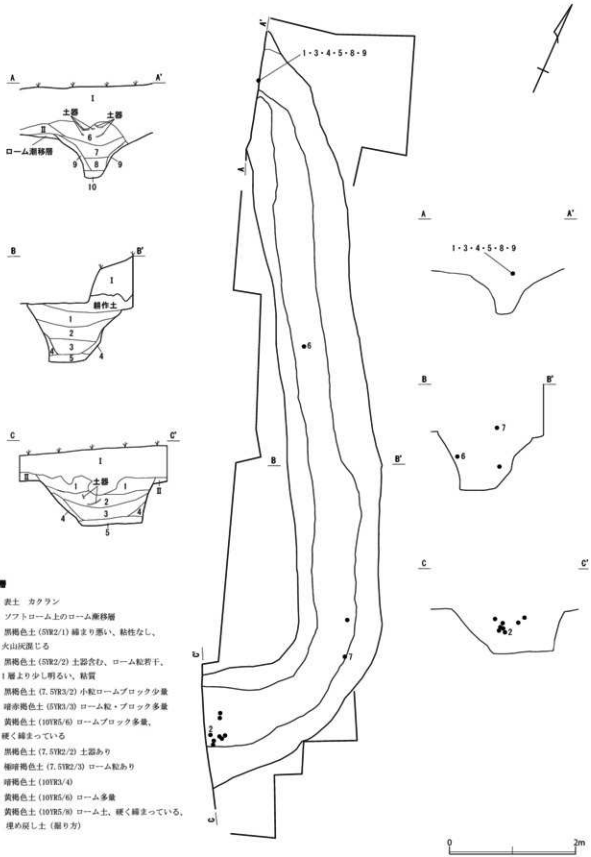
住居土層

I. 表土・耕作土

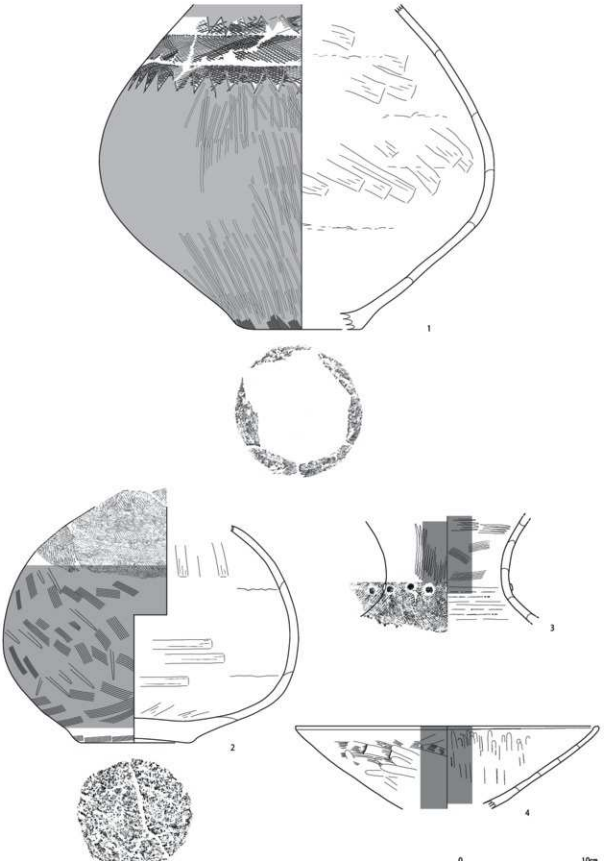
II. ローム漸移層

1. 黒褐色土（7.5YR2/2）
2. 黒褐色土（5YR2/1）ローム粒若干、炭化物多量
3. にぶい黄褐色土（10YR5/4）ローム粒多量
4. にぶい黄褐色土（10YR4/3）ロームブロック多量、硬く締まっている（貼床）
5. 灰黄褐色土（10YR4/2）ロームブロック少量、ローム粒少量、黒色土多量、硬く締まっている（張り方）

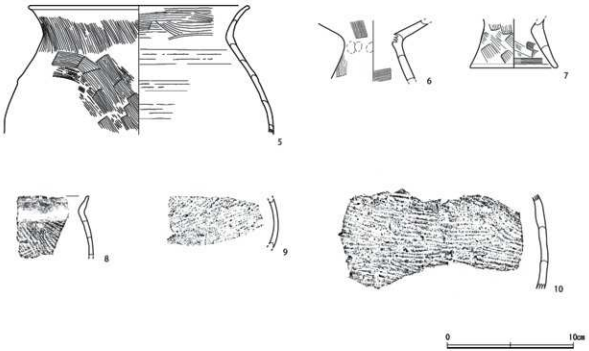
第12図　第５号住居跡平・断面図（L＝27.9m）



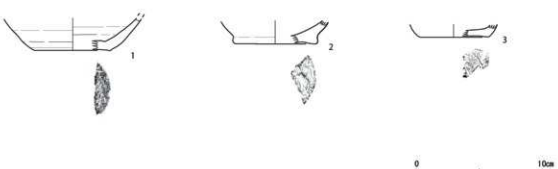
第13図　第１号方形周溝墓平・断面図（L＝28.2m）



第14図　第1号方形周溝墓出土遺物（1）



第15図　第1号方形周溝墓出土遺物（2）



第16図　遺構外出土遺物

第２表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表

№	器種	部位	文様構成・形態・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器 壺	肩部～ 底部	胴部中位に最大径をもち、球形を呈する。肩部外面撚糸ＬとＲの端末結節網目状文を鋸歯文で区画、胴部外面丁寧な縦位ヘラミガキ、下端縦位ハケ目、肩部の一部を除き赤彩、内面横・斜位ヘラナデ、底部焼成後穿孔	にぶい橙色 7.5YR6/4	A・B	良好	底径 9.5 胴部最大径 31.6 古墳時代前期初頭
2	土師器 壺	肩部～ 底部	胴部中位よりやや下に最大径をもち、やや下膨れ気味の器形を呈する。肩部外面撚糸Ｌを羽状に３段、胴部外面斜位ハケ目後、斜位ヘラミガキ、内面縦・斜位ヘラナデ、胴部外面赤彩、底部木葉痕	橙色 7.5YR6/8	A・B	普通	底径 9.6 胴部最大径（23.7） 古墳時代前期初頭
3	土師器 壺	頸部～ 肩部	頸部外面縦位ヘラミガキ、肩部外面縄文ＲとＬを羽状に２段、４個一単位の円形浮文、頸部内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ、肩部横位ヘラナデ、内外面赤彩	橙色 7.5YR6/6	A・B・H	普通	古墳時代前期初頭
4	土師器 高坏	坏部	外面斜位ハケ目後横位ヘラミガキ、内面縦・斜位ヘラミガキ、内外面赤彩および被熱	橙色 7.5YR6/6	A・B・ D・H	普通	口径（24.4） 古墳時代前期初頭
5	土師器 甕	口縁部～ 胴部	口縁部は外反、口唇部は丸みを帯びる。外面斜位ハケ目、口縁部内面横・斜位ハケ目、胴部内面横位ヘラナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3	A・B	良好	口径 17.8 胴部最大径（21.6） 古墳時代前期初頭
6	土師器 台付甕	胴部～ 脚部	脚部は直線的に開く。胴部および脚部外面縦位ハケ目、接合部に指頭圧痕、胴部内面横位ヘラナデ、脚部内面横位ハケ目	にぶい褐色 7.5YR5/4	A・B	良好	古墳時代前期初頭
7	土師器 台付甕	脚部	脚部は直線的に開く。外面縦・斜位ハケ目、内面横・斜位ハケ目	にぶい赤褐色 5YR5/4	A・B	普通	底径（7.0） 古墳時代前期初頭
8	土師器 甕	口縁部～ 胴部	口縁部は外傾しながら開く。口縁部斜位ハケ目後横ナデ、胴部斜位ハケ目	にぶい黄橙色 10YR6/4	A・B	普通	古墳時代前期初頭 №９と同一個体
9	土師器 甕	胴部	横・斜位ハケ目	にぶい黄橙色 10YR6/4	A	普通	古墳時代前期初頭 №８と同一個体
10	土師器 甕	胴部	目の粗い工具による横位ハケ目	褐色 10YR4/4	A・B・D	普通	古墳時代前期初頭

第３表　遺構外出土遺物観察表

№	器種	部位	文様構成・形態・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	カワラケ	体部～ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り、内外面に油煙付着	橙色 7.5YR6/6	A	普通	底径（6.0） 14～15C
2	カワラケ	体部～ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい黄橙色 10YR7/4	A・B	不良	底径（6.8） 14～15C
3	カワラケ	体部～ 底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	にぶい黄橙色 10YR6/4	A	良好	底径（6.0） 14～15C

第Ⅳ章　峯前遺跡（第８次）の調査

第１節　峯前遺跡の概要

峯前遺跡は東武東上線、東京メトロ有楽町線・副都心線和光市駅から北東に約 1.0㎞、和光市新倉２丁目 2987～2989 外に所在する（第３・６図、第１表）。越戸川とその支流の谷中川により開析された浸食谷と荒川低地に挟まれた馬の背状台地に立地している。標高は 25～29m を測り、低地との比高は約 17m 程である。

本遺跡は今回の調査を含めて８回の発掘調査が行われている（第 18・19 図）。これまでの調査の結果から旧石器時代から平安時代に至る複合遺跡であることが判明している。なかでも主体となるのは弥生時代・古墳時代・平安時代である。弥生時代後期末から古墳時代前期では、第６次調査から方形周溝墓３基が検出され、底部が穿孔された広口壺が出土した。平安時代では、第１次調査で「守」と判読できる墨書土器が出土している。また、第５次調査では鉄製品の紡錘車、鎌、鉄鏃が出土している。

周辺の遺跡として南に位置する漆台遺跡（№ 43）、本遺跡が立地する北西へ延びる台地先端にかけて隣接して位置する峯遺跡（№ 35）、花ノ木遺跡（№ 2）は遺跡の構成が類似していることから同一集落として捉えることができる。

第８次調査地点の概観

今回の第８次調査地点は谷中川右岸、本遺跡の北東側に位置する。標高は約 29m を測り、低地との比高は約 17m である。調査区北側に隣接して第２次調査区、北西側に第７次調査区、南西側に第５次調査区が位置する。調査地点の現況はわずかに畑地を残し宅地化されている。

第２節　調査の方法と経過

今回の峯前遺跡第８次調査は、共同住宅建設に伴う事前調査として実施された。調査区は、先に行われた試掘調査の結果をふまえて、対角線が東西・南北にのびる 6m×6m の正方形に設定した。調査面積は事業予定地約 499.02㎡のうち、36.0㎡である。基準点測量は公共座標を基に実施し、4m グリッドを設定した。BM は 29.0m である。

調査にあたって、表土の掘削には重機を使用し、遺構確認及び遺物包含層の掘削は人力で行った。確認された遺構の実測は光波測量と手実測を併用して行った。遺構図面は 1/20 を基本に記録し、写真撮影はデジタルカメラを使用した。

現地調査は令和４年１月 11 日より開始し、同年１月 20 日に完了した。

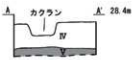
第３節　基本層序

今回の調査では、旧石器時代の遺構・遺物の存否を確認する目的で、C-3・4 グリッドに 1.3m×1.4m の範囲で試掘坑を設定し、遺構確認面以下、武蔵野台地標準層序のⅤ層下面までを目安に深掘り調査を実施した。現地標高は約 28.7m で、現地表面から深さ約 45㎝までは近現代の整地層である。当該期の遺構・遺物は未確認に終わったが本試掘坑北西壁の土層

断面を第 17 図に図示する。

Ⅳ層　にぶい黄褐色土　ハードローム層。締まり強い、粘性あり、白色粒（φ1mm 以下）を中量、黒色粒（φ3mm 以下）を多量、橙褐色粒（1mm 以下）を多量含む

Ⅴ層　褐色土　黒褐色土層（第Ⅰ黒色帯）。締まりあり、粘性あり、白色粒（φ1mm 以下）を少量、黒色粒（φ2mm 以下）を中量、橙褐色粒（2mm 以下）を中量含む



第 17 図　基本層序（S＝1/60）

第 4 節　検出された遺構と遺物

第 15 号住居跡（第 21 図、図版 7・8）

位置　調査区中央、B・C-3・4 グリッドに位置する。遺構は、Ⅳ層まで攪乱が及んでいるため多くが削平されており、掘り方と柱穴のみが確認された。

形状・規模　掘り方から推測できる平面形は隅丸長方形か楕円形を呈し、残存長は長軸 3.15m、短軸 2.7m を測る。掘り方の掘り込みは 28㎝で、長軸方向は N-48°-W を示すものと推定される。入口施設は、住居跡の長軸線に沿った南東部、P5 の周辺にあったと考えられる。確認された掘り方は、上端はやや不整形で、柱穴 5 基を結ぶ内側の範囲を一段深く掘り下げた形状であったと考えられる。従って本来の住居跡の平面は、検出された掘り方の規模よりも一回り大きかったことが想定される。

覆土　10 層に分けられる。掘り方内の埋土である。

柱穴　5 基検出された。そのうち P1～P4 が主柱穴で、住居跡の長軸線に沿った南東側に位置する P5 が、位置関係から判断して入口施設の柱穴と考えられる。

炉跡　住居跡長軸線上の北西側から焼土が検出された。焼土はわずかに遺存するのみであるが、その位置関係から炉跡であった可能性が高い。

出土遺物　土器小破片が 15 点出土した。

時期　検出された遺構の形状から、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

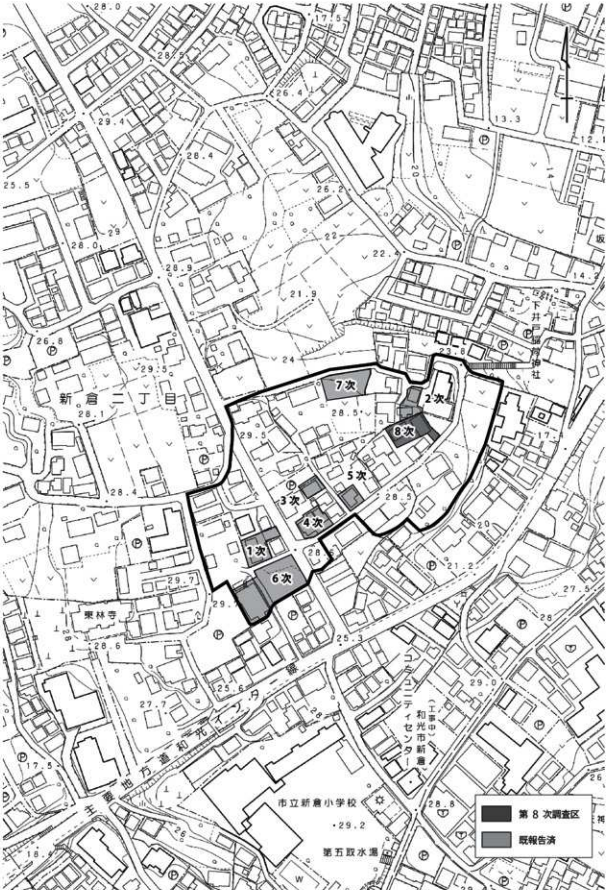
第 5 節　小結

今回の峯前遺跡第 8 次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡が 1 軒検出され、遺物が 15 点出土した。

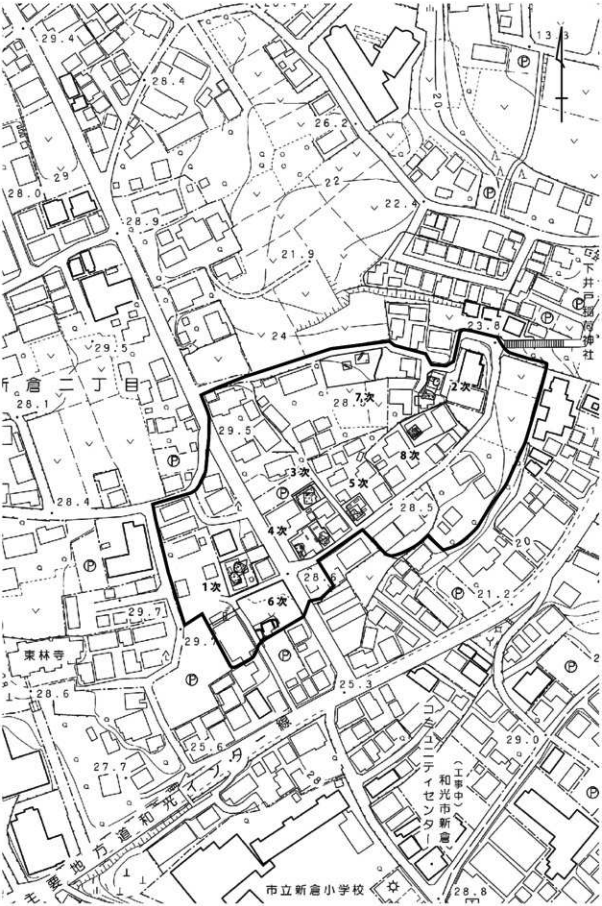
峯前遺跡はこれまでの調査から、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が多数検出されている。今回の第 8 次調査でも、この地域一帯の当該期における遺構の分布域の広がりをさらに窺い知ることができた。

【参考文献】

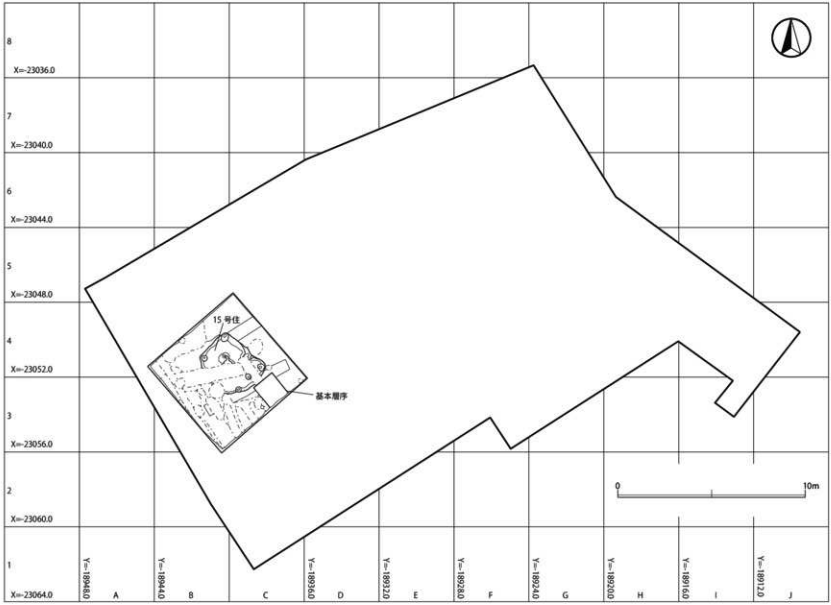
鈴木一郎ほか　2019『和光市埋蔵文化財調査報告書第 66 集　午王山遺跡総括報告書』和光市教育委員会



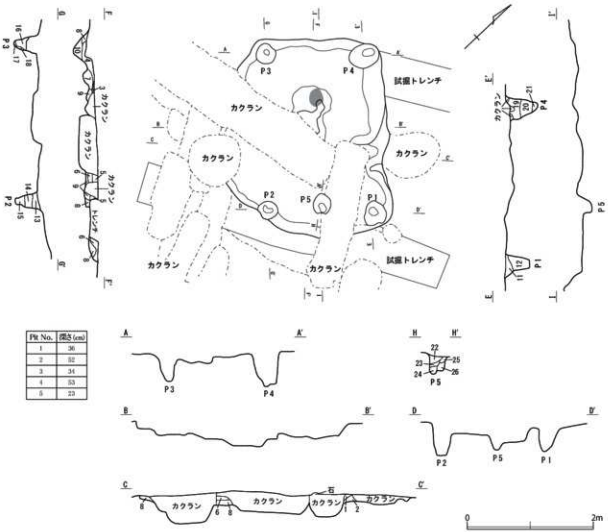
第18図　峯前遺跡発掘調査位置図（S=1/2500）



第19図　峯前遺跡遺構位置図（S=1/2000）



第20図　峯前遺跡第8次調査区遺構全体配置図



住居土層

1 黒褐色土（10YR3/1）締まりややあり、粘性あり。
ローム粒（φ1～5mm）を微量含む。

2 褐色土（10YR4/4）締まりあり、粘性やや強い。
黒ボク土（φ1～5mm）を少量、ローム粒（φ1～5mm）を多量、
ロームブロック（φ5～10mm）を少量含む。

3 黒褐色土（10YR3/1）締まり強い、粘性あり。焼土（φ1～6mm）を中量含む。

4 黒褐色土（10YR3/1）締まり強い、粘性あり。ローム粒（φ1～3mm）を少量、
ロームブロック（φ5～8mm）を微量、焼土（φ1mm以下）を微量含む。

5 黒褐色土（10YR3/2）締まり強い、粘性あり。ローム粒（φ1mm以下）を微量、
焼土（φ1mm以下）を微量含む。

6 黒褐色土（10YR3/1）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～3mm）を少量
含む。

7 灰黄褐色土（10YR4/2）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～4mm）を中量、
ソフトロームブロック（φ10～20mm）を中量含む。

8 にぶい黄褐（10YR4/3）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～3mm）を多量、
ロームブロック（φ10～15mm）を少量含む。10YR3/1ベース。

9 にぶい黄褐色土（10YR5/4）締まりあり、粘性あり。ローム粒・ブロック
（φ1～30mm）を中量含む。

10 にぶい黄褐色土（10YR5/4）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～2mm）を
少量、ロームブロック（φ5～70mm）を多量含む。10YR3/1ベース。

P1土層

11 暗褐色土（10YR3/3）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～5mm）を多量
含む。

12 黄褐色土（10YR5/6）締まり弱い、粘性あり。ローム粒・ブロック
（φ1～50mm）を多量含む。

P2土層

13 黒褐色土（10YR2/2）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～10mm）を多量含む。

14 黒褐色土（10YR2/2）締まりやや弱い、粘性あり。ローム粒（φ1～5mm）を多量
含む。

15 黄褐色土（10YR5/6）締まり弱い粘性、やや強い。ローム粒・ブロック
（φ1～50mm）を多量含む。

P3土層

16 黒褐色土（10YR3/2）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～10mm）を少量、
ロームブロック（φ10～50mm）を多量含む。

17 にぶい黄褐色土（10YR5/4）締まり強い、粘性あり。ローム粒（φ1～5mm）を多量
含む。

18 にぶい黄褐色土（10YR5/4）締まり強い、粘性あり。ロームブロック（φ1～30mm）を
多量含む。

P4土層

19 黒褐色土（10YR3/2）締まりあり、粘性あり。ローム粒・ブロック（φ1～30mm）を
少量含む。

20 黒褐色土（10YR3/2）締まりやや弱い、粘性あり。ローム粒（φ1～5mm）を微量
含む。

21 にぶい黄褐土（10YR4/3）締まり強い、粘性あり。ローム粒（φ1～10mm）を多量
含む。

P5土層

22 黒褐色土（10YR3/2）締まりあり、粘性あり。ローム粒（φ1～5mm）を微量含む。

23 黒褐色土（10YR2/2）締まりややあり、粘性やや強い。ローム粒（φ1～3 mm）を
微量含む。

24 黒褐色土（10YR2/2）締まりあり、粘性やや強い。ローム粒（φ1～5mm）を少量
含む。

25 黒褐色土（10YR2/2）締まり強い、粘性あり。ロームブロック（φ1～20mm）を少量
含む。

26 黒褐色土（10YR2/2）締まり強い、粘性あり。ローム粒・ブロック（φ1～20mm）を
多量含む。

第21図　第15号住居跡平・断面図（L=28.5m）

第Ⅴ章　付篇　越後山遺跡出土種子圧痕土器について

第１節　経緯と概要

(1)　資料報告の経緯

越後山遺跡は周知の和光市埋蔵文化財包蔵地№11-041に該当する遺跡で、これまでに７回の発掘調査が行われている（第22・23図）。第２次調査で出土した種子圧痕土器は、報告当時土器の圧痕が種子とは気付かなかったことから、実測図には反映しなかった。その後、2015年に金子直行氏・中山誠二氏・佐野隆氏の「ダイズ属の種子を混入した縄文土器－埼玉県和光市越後山遺跡出土の圧痕同定－」が『埼玉考古』第50号に、2016年には同三氏により「越後山遺跡のダイズ属の種子圧痕」が『山梨県考古学協会誌』第24号に報告されたことから改めて注目されることになった。そこで、その重要性に鑑み、種子圧痕を含む土器実測図・展開写真を作成し本書に掲載することとし、さらに金子直行氏に種子圧痕土器の編年的位置づけと学術的意義について玉稿を賜った（本章第２節）。また、朝霞市教育委員会文化財課のご協力により、展開写真撮影を実施した（使用機材等については、本節⑶のとおり）。

(2)　遺跡の概要

越後山遺跡は和光市南１丁目地内に所在する旧石器時代のブロック・縄文時代中期後半の集落と古墳時代の集落を中心とした複合遺跡である。立地は、白子川に南面する武蔵野台地末端にあり、低地面からの比高はおよそ16m前後である。調査は、７次まで行われ、確認された住居跡は29軒、内訳は縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式期が17軒、弥生～古墳時代の住居跡が12軒である。

種子圧痕土器が検出された第７号住居跡（第24図）は、３条の周溝が確認され、２度の拡張と上屋の建替えが推測される隅丸方形住居跡である。最大の外周プランは4.9×4.7mを測り、確認面からの掘り込みはおよそ30～50㎝である。検出された主な土器は、概ね覆土中層から検出しており、一括投棄の可能性が指摘されている（伴出遺物の詳細等は和光市埋蔵文化財調査報告書第50集を参照されたい）。

(3)　展開写真について

展開写真撮影については、SfM-MVSの手法を用いて以下のとおり行った。

撮影カメラ	撮影仕様※	撮影枚数	使用ソフトウェア
SONY ILCE-6000 30mm マクロレンズ (35mm換算：45mm) ※PLフィルター使用	外面：ISO200 F16 シャッタースピード1/8 (石膏箇所1/15) ※ターンテーブル使用	外面：651枚 (統合内訳) 口縁～底面：506枚・ 胴部上半～口唇部：145枚	【簡易3Dモデル作成】 Agisoft Metashape Professional 【扇形展開】 GigaMesh 【レンダリング】 CloudCompare
	内面：ISO320 F13 シャッタースピード1/60 (石膏箇所1/100) ※ドーリー台車使用	内面：296枚	

※内外面とも石膏箇所を＃2000程度のペーパー（今回はメラミンスポンジ）処理し反射を抑えた後、水彩色鉛筆（グレー系）の芯を粉末にしたものを塗布。

第２節　ダイズ属の種子を混入した越後山遺跡出土の縄文中期土器

金子直行

1. はじめに

和光市越後山遺跡第７号住居跡から出土した縄文時代中期後葉の深鉢形土器の器表面には、多数の種子圧痕が付着していた。平成 26 年の７月に開催された埼玉県の「最新出土品展－地中からのメッセージ－」で展示された際に種子圧痕が確認され、話題を呼んだ土器である。筆者は和光市教育委員会の了解を得て、山梨県立博物館の中山誠二氏、北杜市教育委員会の佐野隆氏とともに、種子圧痕のレプリカ調査を行って実態を調査した。レプリカ調査とは、歯型を採るときのシリコーン樹脂に類するもので種子圧痕の形を写し取り、走査電子顕微鏡で表面を観察して種子の同定を行うものである。調査は平成 26 年の冬と、翌年の平成 27 年の春の２回に分けて行い、成果を『埼玉考古』第 50 号と『山梨県考古学協会誌』第 24 号に報告した。

ここではその成果をもとに、越後山遺跡第７号住居跡出土種子圧痕土器の考古学的資料価値の重要性について、述べることとする。

2. 種子圧痕土器の属性

先ず、この種子圧痕土器は、武蔵野台地の北東端にあたる和光市南１丁目地内の越後山遺跡で、平成 11 年 10 月から平成 12 年２月に行われた第２次調査の第７号住居跡から出土したものである。縄文時代中期後葉の加曽利 EI 式新段階の土器で、口縁部文様帯を持たない深鉢形土器である。欠損部分もあるが、復元口径 22.3㎝、器高 26.3㎝、底径 8.2㎝を測り、約 70％の完存率で、復元されている。土器は無文の口縁部が大きく開き、筒形の胴部に移行する加曽利 EI 式土器に一般的に見られる器形であり、特殊性は見られない。頸部を隆帯で区画し、胴部の撚糸文 L 地文上に低隆帯の渦巻文を施文するものであるが、あまり例のない文様構成である。

胴部の文様は、頸部の区画隆帯から１本隆帯の渦巻文を垂下させ、この渦巻文から１本隆帯の渦巻文を横位に派生させ、派生させた渦巻文からさらに１本隆帯の渦巻文を横位に派生させ、最後に派生させた渦巻文からクランク状に派生、垂下する隆帯文を連結させてモチーフを収束させる構成を採る。このクランク文で、横位の渦巻文の連結は一周せず途切れる。また、派生する渦巻文からは、２本隆帯の懸垂文を垂下する。欠損のため不明であるが、頸部から垂下する渦巻文の下部にも２本隆帯を懸垂する可能性は高い。これに対して、クランク状の垂下隆帯文は１本であることに注意したい。

これは主要モチーフの描線が１本隆帯で、懸垂文が２本隆帯であることを示している。派生する渦巻文を横位連結しクランク状に垂下する構成は、南東北地方の大木 8a 式に祖形が求められ、２本隆帯の懸垂文は関東地方の加曽利 E 式の構成である。描線が低隆帯である点にやや甲信地方の曽利式系の要素が見られるが、全体的には大木 8a 式系と加曽利 EI 式系の要素が折衷する大木 8b 式段階の土器で、そこにやや曽利式系の要素も加味されて、この土器のモチーフが出来上がったと推定される。胎土等から搬入品ではなく、在地産の土器であると判断される。つまり、加曽利 EI 式土器をベースとして、大木式的な文様展開を、曽

利式的な低隆帯の連結渦巻文手法で表現しており、地元、南東北、甲信地方の折衷要素が窺える土器である。

3. 種子圧痕について

この土器の器表面に観察された種子圧痕の内、1回目27点、2回目57点の合計84点についてレプリカ調査を実施した。器表面で観察でき、圧痕を採取することができた数であり、完形土器であった場合には圧痕が優に200点を超えるものと推定される。

84点の観察の結果、ダイズ属34点、ダイズ属近似種19点、マメ科5点、シソ属1点、不明種10点、不明15点が確認され、その約6割強がダイズ属によって占められている点が注目される。ダイズ属には野生種のツルマメと栽培種のダイズがあり、長さ×幅×厚さの体積が60㎣を境として、それ以下がツルマメ型、61㎣以上がダイズ型に分類されている（中山2015）。越後山遺跡のダイズ属はやや小型のツルマメ型が約7割、やや大きめのダイズ型が3割を占めていた。そして、栽培種に匹敵する大きさのダイズ型も2点検出され、大きさにばらつきのあることが理解される。

そして、これらのダイズ属圧痕の殆どに、表皮を覆う膜状組織が観察された。これは、現生の完熟したツルマメの表皮に見られる膜状組織（bloom）に相当するもので、本来は六角形状の蜂の巣型の膜状組織であるが、観察されたものには変形して円形状の形態となったものも存在した。この膜状組織（bloom）は疎水性のたんぱく質で組成され、吸水性を阻害する役割を持つと考えられている。つまり、完熟種子が莢から自然播種された後に、短期間で水分を吸収して発芽することを抑制する役割（休眠性）を持つものと考えられ、現生の栽培ダイズには見られないことから、野生型の大きな特徴となる。

越後山遺跡のダイズ種には、野生型のツルマメから栽培型のダイズ型に近いものまで大きさにばらつきがある。栽培型の中には表皮が膜状組織に覆われ、ツルマメ同様の休眠性を有する個体が存在し、野生型と栽培型の両者の特徴を備えた中間的な属性を示す個体が存在する。

栽培型に近い種実の大型化と、野生型に近い休眠性を兼ね備える中間的な属性の関係についてはいかに解釈するかが問題となるが、栽培化によって休眠性が払拭されるよりも先行して種子の大型化が進んだ現象として把握される可能性が高い。

つまり、越後山遺跡出土の種子圧痕土器は、確実に野生型のツルマメが存在する一方で、野生種が栽培化される過程にある半栽培的な状況を示す個体も存在し、ダイズ型を含めた種実のドメスティケーション（栽培化）化の過程が検討できる貴重な情報を保有する土器として、考古学的にその価値が高く評価される。

4. 種子圧痕土器の意義

栽培型である大型のダイズ型圧痕は、すでに縄文時代中期中葉の中部高地の勝坂式土器に見られるが、越後山遺跡の種子圧痕土器では2点含まれていた。栽培型と認定されるかは難しいところであるが、埼玉県内において大型のダイズ型圧痕はほとんど検出されていない状況から判断して、少数とはいえ大変貴重な例と言えよう。越後山遺跡例が中期後葉の加曽利EI式後半で半栽培種的な特徴を持ち、中部高地の勝坂式より時期が新しいことは、

栽培型のダイズ型が時期を新しくするに連れて周辺へと拡散する状況、すなわちダイズ属のドメスティケーションの拡散化を示しているものと考えられる。越後山遺跡例にはドメスティケーションの中間的な特徴を持つダイズ属が存在していたことを意味している可能性がある。

埼玉県内で種子圧痕文土器は殆ど検出されていないが、数個の圧痕を見る土器は存在する。しかし、現荒川を境として左岸の大宮台地ではほとんど未検出であり、右岸の武蔵野台地や入間台地で少量みられる程度である。一例では、飯能市芦苅場遺跡（金子 2020）第 68 号住居跡出土の加曽利 EI 式後半段階の浅鉢土器にダイズ属の圧痕が見られ、同一土器にはシソ属の果実の圧痕が多数見られた。レントゲン写真の結果、多数の種実が器壁に含まれていることが明らかになっている。越後山遺跡例と同様に、大量の種子圧痕土器と言えよう。しかし、その対象がシソ属の果実になっている点が異なる。また、他の何点かの検出例から、ダイズ属の圧痕は勝坂式土器に多く見られる傾向にあり、他にササゲ属アズキ亜属も多数を占めていた。

さらに、やや離れた神奈川県相模原市の勝坂遺跡（中山・佐野 2015）からも、中期後葉の加曽利 EII 式期の連弧文土器に大量の野生型のツルマメを混入した土器が出土している。越後山遺跡よりも新しくなっても、野生型のツルマメを主体としている。その中に、やはり 1 点のみ栽培型の大型のダイズが検出されている。少量検出される栽培型のダイズと、野生型のツルマメの関係は一通りの解釈では理解の難しい部分があり、ドメスティケーションについては時期や地域における変容について細かな検証が必要となる。その意味でも、越後山遺跡の種子圧痕土器は重要な意味を持つ。

他に、植物種子を複数混入する事例は、東京都本宿町遺跡のシソ属の混入（中山 2009）、長野県目切遺跡のアズキの混入（会田 2012）等があり、単一の種子が多数混入していることに特徴や意味があろう。

では、何故大量の種子を土器に混入させるのか、その意味については、推測の域を出ないが、いくつかの解釈が提示されている。土器作りの際に周囲にあった種子が偶然に混入したとする解釈もあるが、多量の種子は偶然に混入する量ではなく、ツルマメなどの大きさは焼成時に爆ぜる可能性が高く、本来ならば除去の対象となる異物でもある。それを敢えて混入することから、意図的な意味のある行為であることが想定される。

マメ類は節分のまめ撒きに代表されるように、古くから邪気を払う呪術的な意味合いや、マメの豊かな繁殖性から豊穣を願う意味合い等から、縄文人の精神世界に強く関わってきた可能性が高いと言えよう。また、一方では、ダイズ属を含めたマメ類の利用は、水産資源の乏しい中部地方の内陸部ではタンパク質の補完食糧資源として利用が促進されてきた可能性も考えられている（佐野 2014）。

いずれにしても土器製作において不必要な異物としてのダイズ類を含む種子類を多量に混入させることは、縄文人の精神世界に根付く呪術的な意味合いが強く感じられる。越後山遺跡例は、土器内面が強い被熱によりただれていた。通常の土器使用では見られない現象であり、土器内で火を焚いたか、何かの使用後に内面にまで火がまわるような二次焼成を受けたのかは不明ではあるが、精神性を反映させた使用法が考えられる。ダイズ類の種子混入との関係は、今後の検討に委ねられる。

このようなダイズ類を含むマメ類のドメスティケーション化や、種子圧痕土器の意味論を解決するには、さらなる類例の探索と詳細な分析が必要となるが、越後山遺跡出土の種子圧痕土器は珍しい種子圧痕土器に留まらず、これらの分析に重要な基礎データを提供する貴重な土器である点が、高く評価される所以である。

【参考文献】

会田　進・中沢道彦・那須浩郎・佐々木由香・山田武文・奥石　甫　2012「長野県岡谷市目切遺跡出土の炭化種実とレプリカ法による土器種実圧痕の研究」『資源環境と人類』第２号　pp.49-64

金子直行・中山誠二・佐野隆　2015「ダイズ属の種子を混入した縄文土器－埼玉県和光市越後山遺跡出土の圧痕同定－」『埼玉考古』50　pp.1-16　埼玉考古学会

金子直行　2020『向原Ａ／芦苅場』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 465 集

佐野　隆　2014「縄文時代中期における内陸中部地方の生業と野生マメ類利用」『日韓における穀物農耕の起源』山梨県立博物館調査研究報告９　pp.310-317　山梨県立博物館

鈴木一郎ほか　2003『和光市埋蔵文化財調査報告書第 27 集　花ノ木遺跡（第６次）・仏ノ木遺跡（第２・３次）・峯前遺跡（第４・５次）・越後山遺跡（第１次）』和光市教育委員会

鈴木一郎ほか　2004『和光市埋蔵文化財調査報告書第 33 集　越後山遺跡（第４・５次）・午王山遺跡（第８次）』和光市教育委員会

鈴木一郎ほか　2006『和光市埋蔵文化財調査報告書第 37 集　花ノ木遺跡（第７・８次）・越後山遺跡（第３次）』和光市遺跡調査会・和光市教育委員会

鈴木一郎ほか　2013『和光市埋蔵文化財調査報告書第 50 集　越後山遺跡（第２次・第６次）』和光市遺跡調査会・和光市教育委員会

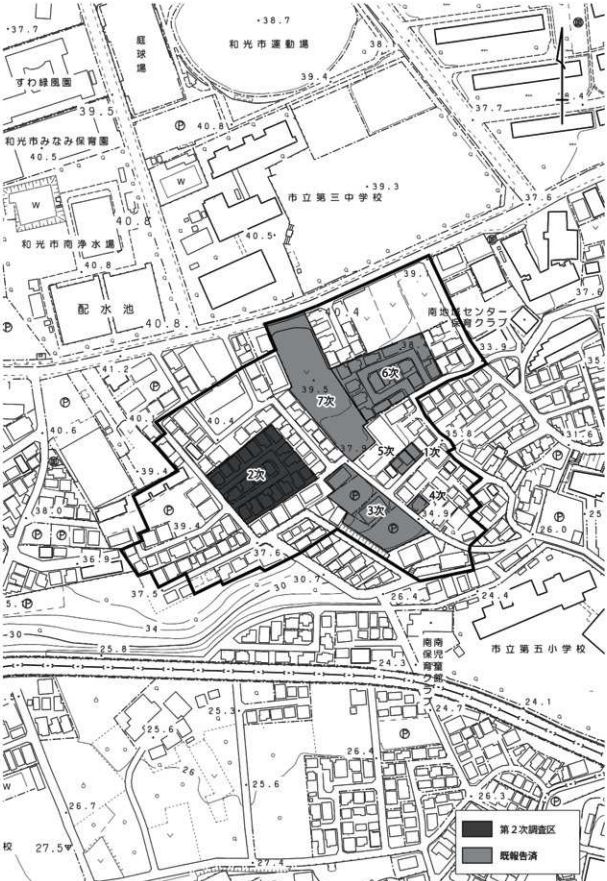
鈴木一郎ほか　2016『和光市埋蔵文化財調査報告書第 62 集　花ノ木遺跡（第 13 次）・越後山遺跡（第７次）・峯前遺跡（第７次）』和光市教育委員会

中山誠二　2009「植物種実痕同定」『武蔵国府関連遺跡調査報告 40』pp.139-142　府中市教育委員会・府中市遺跡調査会

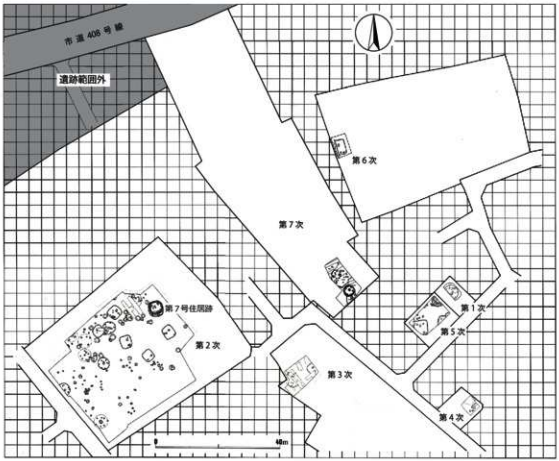
中山誠二　2015「縄文時代のダイズの栽培化と種子の形態分化」『植生史研究』第 23 巻第２号　pp.33-42　日本植生史学会

中山誠二・佐野隆　2015「ツルマメを混入した縄文土器―相模原市勝坂遺跡等の種子圧痕－」『山梨県立博物館研究紀要』第９集　pp.1-24　山梨県立博物館

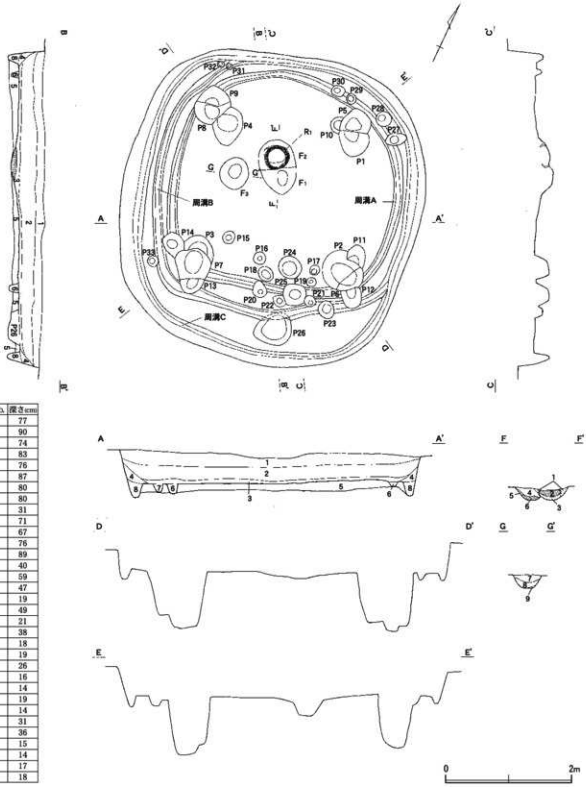
中山誠二・金子直行・佐野隆　2016「越後山遺跡のダイズ属の種子圧痕」『山梨県考古学協会誌』第 24 号　pp.15-30　山梨県考古学協会



第22図　越後山遺跡発掘調査位置図（S＝1/2500）

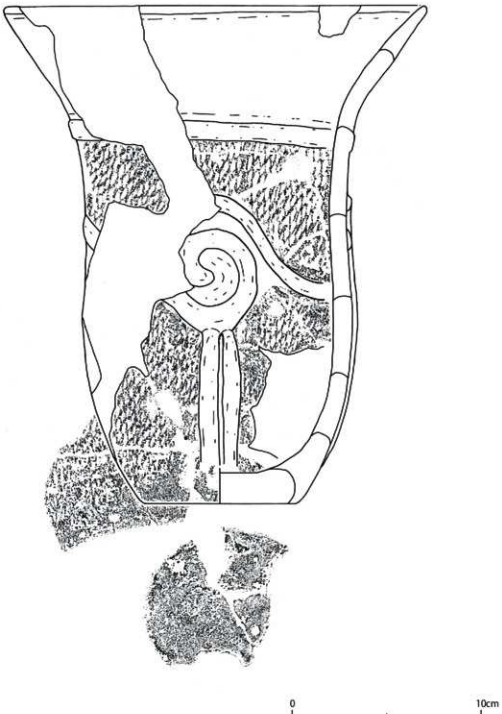


第23図　越後山遺跡遺構位置図（S＝1/1200）

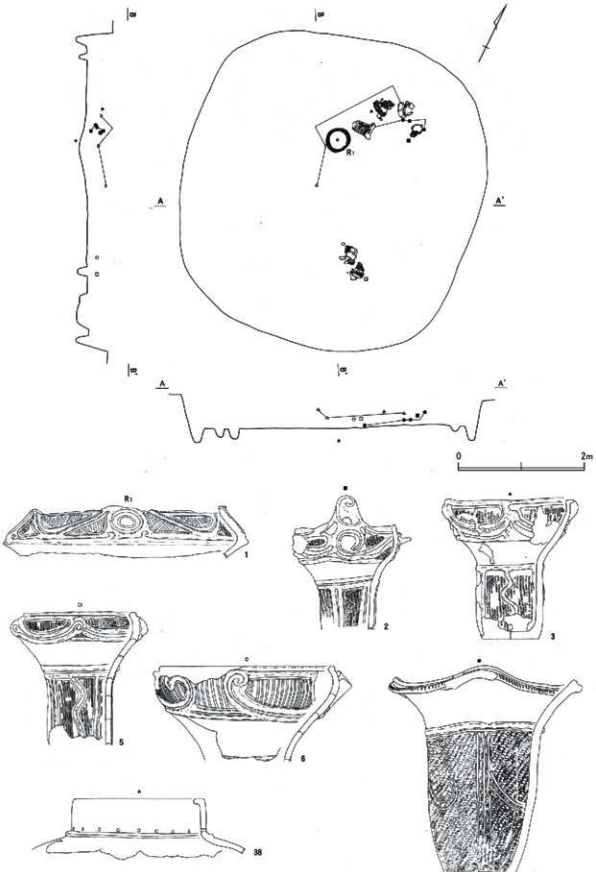


Pit No.	深さ(cm)
1	77
2	90
3	74
4	83
5	76
6	87
7	80
8	80
9	31
10	71
11	67
12	76
13	89
14	40
15	59
16	47
17	19
18	49
19	21
20	38
21	18
22	19
23	26
24	16
25	14
26	19
27	14
28	31
29	36
30	15
31	14
32	17
33	18

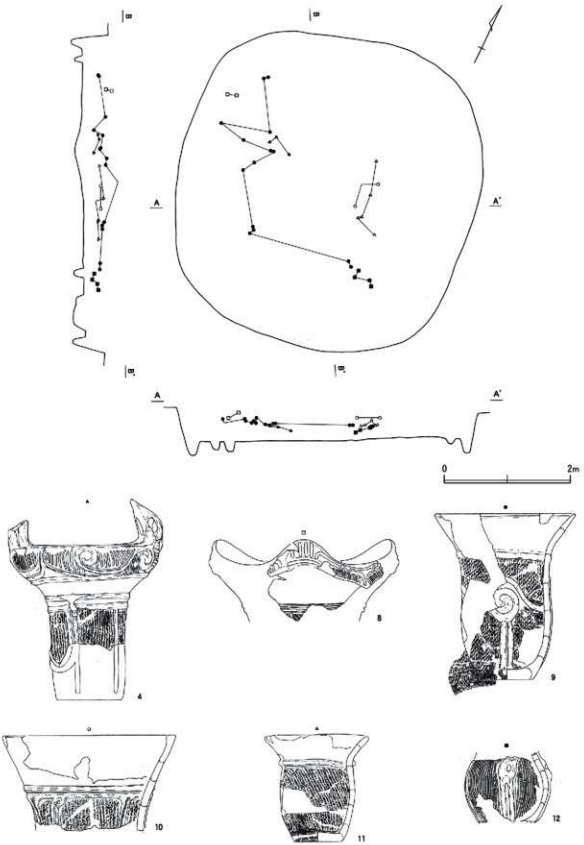
第24図　第７号住居跡平・断面図（L＝39.6m）



第25図　種子圧痕土器実測図（第50集 p44 第28図 9 より転載、底部拓本加筆）



第27図　第７号住居跡土器個体別分布図（１）（L=39.6m）



第28図　第７号住居跡土器個体別分布図（２）（L=39.6m）

第29図　種子圧痕土器正面写真

第30図　種子圧痕土器外面展開写真

第31図　種子圧痕土器内面展開写真

第32図　種子圧痕土器６面展開写真

第33図　種子圧痕土器平面展開写真

資料 令和4（2022）年度　埋蔵文化財確認調査一覧

No.	遺跡名（No.）	原因	調査日	調査地	面積（㎡）	調査概要
1	西越後山遺跡（11-042）	個人住宅建設	R4.4.13	南1丁目2542番4の一部	129.57	遺構・遺物は確認されなかった
2	西越後山遺跡（11-042）	分譲住宅建設	R4.4.22	南1丁目2543-15番の一部	129.60	遺構・遺物あり 和光市教育委員会による発掘調査
3	越之上遺跡（11-039）	公園施設の撤去工事	R4.5.18	白子2丁目11番地内	631.30	工事立会
4	仏ノ木遺跡（11-036）	宅地造成	R4.5.24	下新倉4丁目833番1 834番1、835番、836番2	846.56	遺構・遺物あり 和光市教育委員会による発掘調査
5	仏ノ木遺跡（11-036）	個人住宅建設	R4.6.10	下新倉3丁目925番5	103.47	遺構・遺物は確認されなかった
6	市場峡・市場上遺跡（11-017）	分譲住宅建設	R4.6.16	白子3丁目586-15	85.34	遺構・遺物は確認されなかった
7	白子宿上遺跡（11-019）	ガス管埋設工事	R4.6.23 6.24	白子2丁目12	17.82	工事立会
8	西越後山遺跡（11-042）	集合住宅建設	R4.7.7	南1丁目2535番3の一部	499.52	遺構・遺物は確認されなかった
9	仏ノ木遺跡（11-036）	分譲住宅建設	R4.7.12	下新倉3丁目905番10	132.47	遺構・遺物は確認されなかった
10	越後山遺跡（11-041）	宅地造成 分譲住宅建設	R4.7.21	南1丁目2397番3、 2399番24	473.02	遺構・遺物は確認されなかった
11	向原遺跡（11-007）	ガス管埋設工事	R4.7.29	新倉1-29、1-31	30.20	工事立会
12	下里遺跡（11-012）	ガス管埋設工事	R4.8.1	下新倉4丁目2214-2・-3、 2215-9、2255-3、2257-2、 2258-2・-3・-4	30.00	工事立会
13	柿ノ木坂遺跡（11-011）	個人住宅建設	R4.8.23	新倉1-3765-1	196.44	遺構・遺物は確認されなかった
14	市場峡・市場上遺跡（11-017）	ガス管埋設工事	R4.9.14	白子3-6、3-28	45.96	工事立会
15	吹上遺跡（11-013）	電柱移設工事	R4.9.15 11.22	白子3丁目4434-1	2.00	工事立会
16	越之上遺跡（11-039）	その他の開発（ボーリング）	R4.10.17	白子2丁目1356-1他	12,197.00	工事立会
17	仏ノ木遺跡（11-036）	個人住宅建設	R4.10.26	下新倉4-4-66	730.38	遺構・遺物は確認されなかった
18	吹上遺跡（11-013）	支線張替工事	R4.10.28	白子3丁目4397-3地先	2.00	工事立会
19	白子宿上遺跡（11-019）	個人住宅建設	R4.11.4	白子2丁目1094番2、 1098番2の各一部	188.92	遺構・遺物は確認されなかった
20	峯遺跡（11-035）	集合住宅建設	R4.11.21	新倉2丁目3529-10、 3529-12	98.03	遺構・遺物は確認されなかった
21	吹上遺跡（11-013）	倉庫・事務所建設	R4.11.24	白子3丁目4432-1、 4433-1、4434-2、4435-1	2,476.73	遺構・遺物は確認されなかった
22	向原遺跡（11-007）	分譲住宅建設	R4.11.25	新倉1丁目3847番8	99.89	遺構・遺物は確認されなかった
23	向原遺跡（11-007）	ガス管埋設工事	R4.12.6	新倉1-29	11.70	工事立会
24	吹上遺跡（11-013）	駐車場建設	R4.12.20	白子3丁目4385-1	704.00	遺構・遺物あり、盛土保存
25	花ノ木遺跡（11-002）	分譲住宅建設	R4.12.23	新倉2丁目3459番6の一部	109.18	遺構・遺物は確認されなかった
26	仏ノ木遺跡（11-036）	電柱移設工事	R5.2.3	下新倉4丁目833-3、834-1	2.00	工事立会
27	牛房遺跡（11-021）	電柱建替工事	R5.2.13	南1丁目2275-10、2275-33	4.00	工事立会
28	花ノ木遺跡（11-002）	個人住宅建設	R5.2.17	新倉2丁目21-50	108.36	遺構・遺物あり 和光市教育委員会による発掘調査
29	越之上遺跡（11-039）	集合住宅建設	R5.3.14 3.15	白子2丁目11他	11,582.00	遺構・遺物あり 和光市教育委員会による発掘調査

写 真 図 版

図版１　　昭和31年代の和光市土地利用動向

国土地理院所蔵・（財）日本地図センター発行の以下の写真を加工し使用。
※昭和31年米軍撮影空中写真（国土地理院所蔵）　209～212、288～291。

図版2　峯遺跡（第4次）

第1号方形周溝墓（南東から）

第1号方形周溝墓(北から)

図版3　峯遺跡（第4次）

第1号方形周溝墓（北東コーナー）

基本層序

第1号方形周溝墓土層堆積状態（東から）

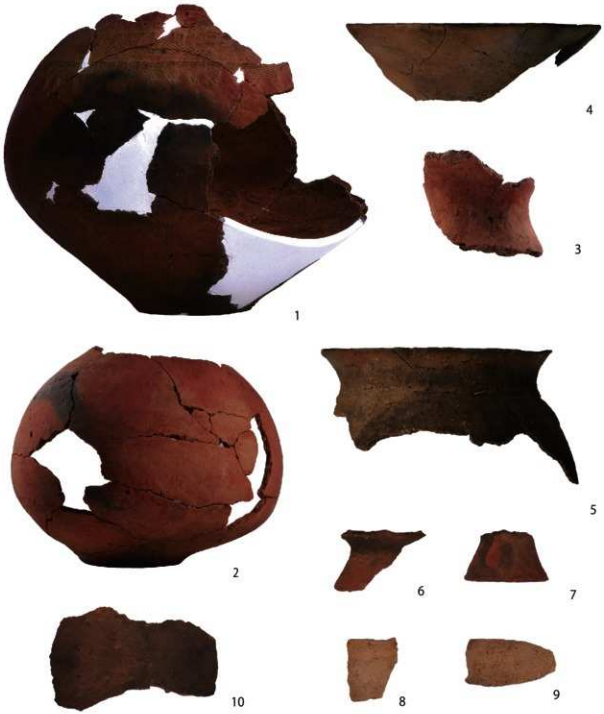
第1号方形周溝墓遺物出土状態（南東コーナー付近）

作業風景

第4号住居跡完掘（西から）

第5号住居跡完掘（西から）

図版5 峯遺跡（第4次）



第1号方形周溝墓出土遺物

遺構外出土遺物

図版6　峯前遺跡（第8次）

調査区近景（南西から）

調査区全景（南西から）

図版7　峯前遺跡（第8次）

第15号住居跡完掘（南東から）

P1土層堆積状態（南西から）

P1完掘（西から）

P2土層堆積状態（南西から）

P2完掘（北から）

P3土層堆積状態（南西から）

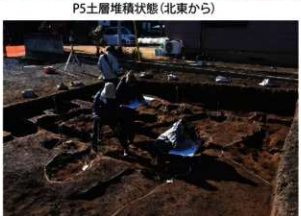
P3完掘（東から）

P4土層堆積状態（南西から）

P4完掘（南西から）

P5土層堆積状態（北東から）

P5完掘（北東から）



作業風景

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	シナイイセキハックツチョウサホウコクショ27
書　　名	市内遺跡発掘調査報告書27
副　書　名	峯遺跡（第4次）　峯前遺跡（第8次）　付篇 越後山遺跡出土種子圧痕土器について
シリーズ名	和光市埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	第71集
編　著　者	山本 龍　鈴木一郎　相田由莉　金子直行　野澤 均　坂口由加里　石橋佳奈
編 集 機 関	和光市教育委員会
所　在　地	〒351-0192　埼玉県和光市広沢1-5　　電話 048-464-1111
発行年月日	2024（令和6）年3月 15日

所収遺跡	所在地	市コード	遺跡	緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
峯遺跡（第4次）	和光市新倉二丁目3470-1の一部 3470-3の一部 3470-4	11229 (11)	035	北緯	35° 47′ 34″	2020(令和2)年6月26日～同年7月27日	55.8㎡	個人住宅建設
				東経	139° 37′ 16″			
峯前遺跡（第8次）	和光市新倉二丁目2983番4, 2984番1	11229 (11)	003	北緯	35° 47′ 42″	2022(令和4)年1月11日～同年1月20日	36.0㎡	共同住宅建設
				東経	139° 37′ 09″			

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
峯遺跡（第4次）	集落	弥生～古墳時代	住居跡2軒		
		古墳時代	方形周溝墓1基	前期初頭土師器壺・甕	
峯前遺跡（第8次）	集落	弥生～古墳時代	住居跡1軒	弥生時代後期～古墳時代前期土器片	

和光市埋蔵文化財調査報告書　第７１集
市内遺跡発掘調査報告書 27

2024（令和6）年 3月 １２日　印刷
2024（令和6）年 3月 １５日　発行
編集・発行　和光市教育委員会
〒351-0192　和光市広沢１－５
電話　０４８－４６４－１１１１
印刷　関東図書株式会社